

3

Gauche was assigned to play the musical instrument called cello in a town's orchestra.

However, as Gauche's cello playing wasn't that good, he was always told off by the conductor.

Since Gauche was really frustrated about it, after getting back home from his daily orchestra practice, he kept on playing cello alone every day, late into the night.

That day, too, Gauche was at home, practicing cello until after midnight.

"Phew, it's so late now. I should go to sleep soon."

Then suddenly, someone outside knocked on the front door.



5

In front of the door was a huge cat.

"Good evening, Mr. Gauche. I came here to hear your cello playing. Please play your cello for me. Oh, this is a souvenir from me."

The cat offered unripe green tomatoes in a basket.

(What an arrogant cat! And to add to it, these tomatoes are from my own garden. Just you wait and see...)

"Very well, I will let you hear my cello playing. Have a seat over there Mr. cat."

Gauche set up his cello.



ゴーシュは、まちの おんがくだんで
セロ (チェロ) という がっきを たんとうしていました。
しかし、ゴーシュの セロのうでは いまいちで、
みんなで れんしゅうを しているときは、
いつも だんちょうに しかられていました。

ゴーシュは それが、くやしくて くやしくて、
れんしゅうが おわって いえに かえってからも、
まいにち よるおそくまで、
ひとりで セロを ひいていました。

そのひも、ゴーシュは よなかまで いえで
セロの れんしゅうを していました。

「ふう、もう こんなじかんか。そろそろ ねないとな」

と、そのとき。

だれかが そとから、いえの ドアを
とんとんと たたきました。



そこに いたのは、おおきな ねこでした。

「こんばんは、ゴーシュさん。

あなたの セロを ききにきました。

さっそく ひいてごらんなさい。

ああ、これは おみやげです」

ねこは かごに はいった、

まだあおい とまとを さしだしました。

(なんて なまいきな ねこだ！

それに その とまとは、

うちの はたけの やつじゃないか。

よ～し、みてるよ・・・)

「いいだろう、セロを ひいてあげよう。

そこに すわりたまえ、ねこくん」

ゴーシュは セロを かまえました。

